

「宗教者災害支援連絡会・第3回情報交換会」(2011年6月19日、於:東京大学仏教青年会)に参加して

【2011年6月23日記】

1、はじめに

宗教者災害支援連絡会・3回情報交換会に参加したので、そのことを報告したい。

「宗教者災害支援連絡会・第3回情報交換会」15時～19時(6月19日、東京大学仏教青年会、本郷3丁目)

東京仏教青年会で行われた「宗教者災害支援連絡会・第3回情報交換会」に参加した。この連絡会は東京大学大学院人文社会系研究科教授の宗教学者であり、本モノ学・感覚価値研究会のメンバーでもある島藺進氏が代表を務めている。島藺氏らの見識と人徳により、このような連絡会が組織され、大変嬉しく思うと同時に、有難くも思っている。こうした動きは阪神淡路大震災の時には生まれていなかったもので、この点だけでも少なくとも公共的な社会意識や社会活動は前進していると思う。

わたしは、第1回目・第2回目に引き続いての参加であった。第3回目の今回も、前々回、前回とほぼ同様、約70名ほどの研究者や宗教家に参加していた。第2回目は全体会と分科会に分かれ、最後にもう1回全体会をして、議論や方向性を集約し、確認するというやり方で進められたが、今回は第1回目と同様、全体会一本で最後まで通したが、そのことによって、参加者全員で全体を共有できたように思う。

案内の進行表には次のようであった。

- (1) 報告会 : 1. 「追悼のとき」の提案
2. 谷山洋三氏 (臨床スピリチュアルケア協会事務局長)
「宗教者による「心のケア」のあり方について」
3. 茅野俊幸 (シャンティ国際ボランティア会専務理事)
「被災地支援と宗教協力」
- (2) 分科会 : (1) 避難受入れ
(2) 被災者受け入れ
(3) 心のケア
- (3) 総合討議

が、実際には、先の述べたように分科会は設けられず、もう一人、吉田律子氏 (浄土真宗) による「岩手県における宗教者の被災地支援」の報告と質疑が加わった。

「追悼のとき」の提案は、東京大学大学院人文社会系研究科教授の箕輪顕量氏 (仏教学) により、3月11日、および各月11日に「追悼」の時間を共有しようという提案であった。

2、「心のケア」と「チャプレン」についての報告と問題提起

次に、谷山洋三氏（臨床スピリチュアルケア協会事務局長）による「宗教者による『心のケア』のあり方について」の報告と質疑応答が行われた。谷山氏は、東北大学大学院文学研究科博士課程を修了後、京都府下の長岡西病院ビハーラ僧、四天王寺（国際仏教）大学教員、聖トマス大学日本グリーンケア研究所主任研究員、上智大学グリーンケア主任研究員を務めてきて、2005年から臨床スピリチュアルケア協会事務局長を務めている。

谷山氏は、「宗教者による『心のケア』のあり方」として、「宗教者だからこそできる」こととして、「チャプレン」のあり方と可能性について報告した。「チャプレン」とは、キリスト教文化圏の中から生まれてきた病院や福祉施設などで緩和ケアや宗教的サービスに関わる仕事をする人を指す。より具体的には、「チャプレン」と名乗る職種には、プロテスタント系キリスト教の教育機関における「学校チャプレン」と、緩和ケアに関わるビハーラ僧・パストラスケアワーカー・スピリチュアルケアワーカー・臨床スピリチュアルケアカウンセラーなどの「病院チャプレン」がある。

興味深かったのは、海外諸国にはいるが、日本にはいないチャプレンとして、軍隊・警察・消防隊・救急隊・企業・プロスポーツ・事故災害などに関わる専門的訓練を受けたチャプレンがいないという点だった。

「災害チャプレン」とは、「災害発生直後に現地に入り、宗教的サービスやカウンセリングなどによって、市民の精神的安定を図るとともに、関係各所に対して必要な支援・サービス・支援物資など情報提供を行う」者で、「軍・警察・消防との有機的連携が不可欠」の役割を担う人だという。

「チャプレン」は、「宗教的に中立」で、「複数の宗派・教派の典礼を実施出来ることが望ましい」とされ、「危機的状況にある患者、家族、被災者、被害者、悲嘆者、専門職スタッフなどのスピリチュアルケア及びグリーンケア」を行ない、「患者・家族・スタッフ間の代弁、仲介、調停」や「多宗教間の連絡・調整」を行なう者とされる（「チャプレン行動規範」こころの相談室ホームページ掲載）

ホスピス・緩和ケアは、日本では、1970年代以降に「スピリチュアル・ペイン」への対応として一般の医療関係者に注目されるようになり、1990年代のWHOの「健康」の定義改正をめぐる議論の中で、ヘルスケアの専門家や宗教関係者に注目されるようになった。

2002年のWHOによる「緩和ケア」の定義は、「緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、疾患の早期より痛み、身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題に関して、きちんとした評価を行ない、それが障害とならないように予防したり、対処することで、クオリティ・オブ・ライフ（QOL）を改善するためのアプローチである」とされる。

谷山氏は、個人の社会的適応や問題解決を目的とする「心理的ケア」と、個人の価値観の再構築・再発見や問題が残ったままでも生きていけるように支える「スピリチュアルケア」との違いを指摘した。

その「スピリチュアルケア」の方法とは、

- ・身体的触れ合い
- ・あたたかい声をかける
- ・カウンセリング
- ・自然との触れ合い
- ・音楽
- ・絵画など（宗教画、風景画、家族画など）
- ・宗教との出会い
- ・家族・集団への所属感（窪寺俊之・井上ウィマラ『スピリチュアルケアへのガイド』より）

とされる。

谷山氏は、「超合理的な体験を物語る機能」や「見えないつながりが感じられる」ことを「スピリチュアリティ」の特徴として挙げ、「苦悩を抱えた人が自分自身の内面を見つめながら、『見えないつながり』によって自分自身を支えているものを（再）確認し、生きる意味を（再）発見し、苦悩を抱えながらも生きていけるように支えること」が「スピリチュアリティによるケア」であると述べた。

その「スピリチュアルケア」のプロセスは、

- ① 苦悩（思い通りに行かないこと）を経験する
- ② それまでの自分の価値、生き方が崩壊する
- ③ 自分自身を見つめなおす
- ④ 超合理的な体験を物語る
- ⑤ 外的もしくは内的な存在との見えないつながりが感じられる
- ⑥ 自分を支えているものに気づく
- ⑦ 生きる意味・目的を（再）発見する

ということであるという。

続いて、そのチャプレンやスピリチュアルケアを行なう人材養成の現状や臨床スピリチュアルケア協会のことが話され、人材養成にはスーパーバイザーの視点が不可欠であることが話された。それは、「自己受容の度合い、自己課題に直視し取り組む能力、感情レベルでの自己・他者プロセスの理解力、関係性運用能力・フィードバック能力、自己の宗教的文化的伝統の有効な活用能力、他社の文化へのセンシビリティ」などで、スーパーバイザーはこれらの点に留意しつつ研修生の成長を援助するという。

チャプレンやスピリチュアルケアワーカーが行なう重要なケアに「グリーフケア」がある。その「悲嘆（グリーフ）」とは、

- ① 愛する人の喪失（死・離別・失恋・裏切り・失踪など）
- ② 所有物の喪失（財産、仕事、ペットを失うなど）
- ③ 環境の喪失（転居、転勤、転校など）

- ④ 役割の喪失（地位、役割、子どもの自立、夫の退職など）
- ⑤ 自尊心の喪失（名誉、名声）
- ⑥ 身体的喪失（病気による衰弱、子宮・乳房・卵巣、頭髪の喪失、老化現象）

（高木慶子『喪失体験と悲嘆』より）

など、種々の「喪失体験」から生ずるとされる。そして、死別後の支援となり得るものは、

- ① 社会制度の利用（忌引き、経済的支援など）
- ② 儀礼（葬儀・告別式、追悼集会、年忌法要など）
- ③ ケア（周囲の人たちの気遣い、分かち合い、スピリチュアルケアなど）
- ④ セラピー（心理療法）
- ⑤ 精神科・心療内科での治療（投薬・心理療法など）

であり、災害時には、物資の支援、瓦礫の撤去、被災家屋の清掃、生活環境の整備も「こころのケア」になると、谷山氏は指摘する。

さらには、グリーフケアとして、個人面談、分かち合いをする自助グループ、ワークショップなどがあり、日本では、仏壇や位牌を大事にしたり、お墓参りしたり、先祖や故人の「たましい」を家に招いて数日家に逗留してもらった後見送るお盆の行事なども、グリーフケアとしての役割を果たしているという。

谷山氏は、今後の展望として、訓練を受けたチャプレンの養成が必要だと主張した。そうした訓練を受けた宗教者は、チャプレンとして檀信徒や信者のよろず相談に応じたり、地域のボランティアチャプレンとして被災地を支え、被災地域の宗教者や医療・福祉施設関係のチャプレンとも連携したり、グリーフケアの会場として自分が関わっている宗教施設を提供するなどの提案もなされた。

谷山氏が被災地に入る前に、自身の宗派である浄土真宗大谷派の勤行・読経などの仕方ばかりではなく、他宗教・他宗派の祈りや勤行・読経の仕方を学んで、現場で出される要望に少しでもきちんと対応できるように準備していったという話が出て、大変興味深かった。谷山氏は、要望があれば、キリスト教の祈りにも応じてきたという。わたしは、「チャプレン」の方向性や仕事として、このような多宗教・他宗派協働がなされることは大変よいことだと思うし、神仏習合などの文化を持つ日本でこうした宗教間協力を行なうことは意義あることだという意見を述べた。

3、宗教者の被災地支援のかたち

続く、自身長野県松本市の曹洞宗の寺院の副住職で公益社団法人・シャンティ国際ボランティア会専務理事の茅野俊之氏と、自身岩手県盛岡市の浄土真宗の寺院の坊守である吉田律子氏の報告は、団体で行うことのできるボランティアと個人で行うことのできるボランティアのあり方を対照的に示していた。

茅野氏は、宮城県気仙沼市や岩手県陸前高田市や大槌町や釜石や福島県南相馬市で行っている同会のボランティア活動の現状を報告した。被災後、3ヶ月を経て、避難所から仮設住宅へと移るころに、「孤

独と向き合い、自分を振り返る時間が長くなる」ことの問題点やそこでの支援のあり方について注意を促した。阪神淡路大震災時の仮設住宅入居後の PTSD への対処の問題など、これから対処していかなければならない問題だと述べた。加えて、福島県の支援の深刻な問題点として、「安心して安らげる場所がほしい」という被災者たちの心からの願いにどのように向き合い、具体的にそのような場所を確保・確立していくことができるかが問われているとも指摘した。

それに対して、吉田律子氏は、団体ではなく、個人でできるボランティアのあり方を自分自身の体験に即してリアルに語った。初めて釜石で瓦礫を見た時の衝撃、「無常」ということを頭の先から足の先まで感じ「地獄」ということも同時に感じたことと実感を込めて報告した。津波に現われた後の被災地は生き物が一匹もない、まさに死の世界のようであったと。

自分でできることが何かあるかと、とるものもとりあえず行ってみたが、弔いとかお経とかも全部すっとなでしまって、大自然の大きさに無力感を感じたと語った。毎日、死体安置所や避難所に通い、個と向き合うことから、ぽつりぽつりと被災者・避難者の心の奥底にある感情がもれてくる。その場に立ち会うことの重要性を経験に即して具体的に語った。

たとえば、黒い衣（袈裟）をつけないで入った時と、着けて入った時の違い。袈裟を着けた時、最初の頃は、「まだ坊さん早いよ。縁起が悪い」とも言われたが、一対一で信頼関係を築き、49 日が過ぎて、僧であることをカミングアウトした時ごろから、僧でなければ話してくれない傾聴ボランティアが進み始めたとも語った。

傾聴ボランティアといっても、ただ「寄り添う」という気持ちだけで、とにかく、一対一で向き合う日々だったという。そして、そこで寄り添いながら、一緒に乗り越えていく。今必要なのは、今寄り添うこと。それが、一人でできる、個人でできる宗教者のボランティアの一つのかたちであることを切実に誠実に生々しく語り、心に響いた。

4. まとめ

さまざまな報告を聞いたり、自ら被災地を訪ねたりしながら、起きてきている問題の一つに、被災地格差や避難所格差などの問題があると思った。福島県と、宮城県・岩手県・青森県の被災地とでは大きく事情が異なる。また、同じ福島県でも避難地区と警戒地区とそれ以外の地域ではまた事情も思いも異なる。原子力発電所の事故を抱えた福島県の問題は、複雑で、微妙で、深刻であるということが、いっそう重くのしかかってきている。というのも、宮城県や岩手県や青森県は、100 日が過ぎて、一つの区切りを持って、いろいろと遅れているとはいえ、復旧・復興への青写真と作業が進みつつある。

だが、福島県では、そのような復旧・復興デザインが描けない。現在進行形の原発事故を抱えているからであることはいままでもない。そのことも原因して、「外に出ることができない人」も少なくないという。また、「風評被害」と呼ばれる問題も含め、正しい情報や適切な判断という情報の伝達や判断の困

難さが行動を逡巡させ、生活全般を息苦しく、重苦しくしているともいえる。

「宗教者災害支援連絡会・3回情報交換会」に参加し、「宗教者」とは何か、「宗教者」ができることとは何か、そこで必要とされていることとは何か、具体的な個々の活動報告を検討しつつ、さらに問題点を整理し、宗教が持っている安らぎや救いや癒しや覚悟のはたらきをどのようなかたちで発揮できていくのか、個々の社会实践とともに、幅広い考察や探究が必要でもあった。

そうした考察や探究に、本「モノ学・感覚価値研究会」が関与し寄与できる場所があるはずだ。具体的には、近藤高弘氏たちと進めつつある「アートによる日本再生計画」やその一つの実現である近藤氏提案の「命のウツワ」支援活動がその一つである。それぞれの現場でできることを投げかけながら、長期にわたる被災地復興のありようにさまざまな支援のかたちを模索していきたい。